



大阪芸術大学芸術学部准教授 浦崎 真一

令和六年二月に策定した「橿原神宮境内林保全活用計画」のご報告、第四回、今回が最終回となります。前回少し残っていた作業ごとの個別の方向性から続けてまいりましょう。

● 水路の管理

橿原神宮の境内地には大小いくつかの水路が通っています。雨の後などは驚くほどの水量が流れているのを見ることができます。このような水路が巡っているものの、部分的には地下水が高く排水不良な箇所も境内に見られ、サクラなど一部の樹種の生育不良や、大雨後のぬかるみ、水たまりを引き起こしています。境内全域の排水を工事によって改善することは膨大な労力を要するものであり、まずは日常的にきつちりと水路管理を行うことで改善を試みます。

境内水路の流水路内のごみや落ち葉等は、詰まりによる排水不良が周囲の過剰な土壌水分状態を引き起こさないよう、熊手、ほうき等で掃き集めて回収します。落ち葉等は水路沿いの二メートル程度は水路への落下をできるだけでなくため蓄積を避け、森の奥側へと敷きならします。流路に汚泥の堆積が著しくなった場合は、浚渫も必要です。流末のストレーナーや集積枿も同様に、堆積した汚泥、ごみ、落ち葉等はすべて取り出し、付着した汚れを清掃することで、境内地の排水状況の経過を観察していきます。これらの管理のため、林内でも水路沿いは植物に手を入れ、管理用のスペースを確保しておくこととします。

● 立ち入りの管理

最後に、立ち入りの管理についてです。健全な森の育成には人の立ち入りを制限することが重要で、立ち入らないことによって植物の踏み荒らしや土壌の固結とそれによる通気通水の障害を防ぐことができます。樹木は根で水分と養分を吸い上げると同時に呼吸をしていますので、良好な土壌の状態はとても大切です。橿原神宮の森も、基本的に人が立ち入らないことで健全性を高めていくことを目指します。よって、人の活動は通路と森林遊苑などの開けた場所のみで可能となります。

このため通路は参拝者が安全に通行できるよう、不陸や損傷、ぬかるみなどがないか巡回点検を行い、美しく清々しい境内を歩んでいただけるよう整えます。通路などを除く境内地は一般参拝者等の立ち入りを制限されていたこととし、必要によって人止め柵、境内林保護柵を設けます。試みに、表参道両脇の植樹帯に竹柵を設けておりましたが、令和七年にカシの生垣を植栽しました。まだ若木ですが、美しい生垣と参道景観となるよう育てていきます。立ち入りの制限はご不便をおかけする面もあるかと思いますが、いつまでもここにみずみずしい森が存在し続けられるよう、皆様にもご理解を賜らなければならない部分です。

● 管理作業とモニタリング

以上述べてきた計画や個別の方向性を確実に管理に反映させるため、計画には十六項目の管理項目シートとして管理作業ごとの場所や時期、留意点をまとめています。これらのシートにもとづき日々の管理を行うことで、計画が目指すところの橿原神宮の境内林へと着実に近づけていきます。

また、作業の進捗を可視化するモニタリングシートを作成し、橿原神宮と大和森林管理協会、大阪芸術大学のメンバーで四半期ごとに確認するモ

ニタリング会議を立ち上げました。現場に任せきりにするのではなく、複数の視点から管理状況を見守ることで、計画の確実な実施と、課題が見つかった際の適切な対応を行っていきます。

◎森とともに暮らす

さて、ここまで檀原神宮の森の保全活用を進めていくための「檀原神宮境内林保全活用計画」について四回にわたりご紹介してきました。ここでもう一度私たちと森との関係を考えてみたいと思います。

日本は先進国でありながら国土の七割に森林を残す世界でも稀有な国だということとは初回に紹介しました。その背景に、社叢に結実する自然の脅威への畏怖と恩恵への感謝、また里山に結実する持続可能な自然からの享受と自然との共生があつたればこそと述べました。しかしながら近年の私たちの生活は、このような自然との付き合いを希薄にし、日頃植物に親しむことが少なくなっている人も多いのではないだろうか。かつての自然の実りの享受とそれに対する感謝も日常では感じにくくなっているかもしれません。

私たちは昔から巨樹をはじめとする緑には畏敬の念をもってきており、御神木や神籬に現れています。近年は生活スタイルの変化やコロナ禍の経験もあつて、緑の効果をオフィスなどのごく身近な生活環境に取り込むバイオフィリックデザインが注目されています。バイオフィリックとはバイオフィリア仮説からきている言葉で、バイオフィリアとは生命とすべての生きているものへの愛好心のことです。ドイツの社会心理学者エーリッヒ・フロムが提唱し、その後、アメリカの動物生態学者のエドワード・オズボーン・ウィルソンが、他の生き物と結びつきたいという生得的な欲求があるとする仮説を発表しました。それがバイオフィリア仮説です。

人間が出現し暮らしていた頃の環境はサバンナやそれに似たものであり、まばらな木々や小さい森が点在する草原でした。人は住む場所を自由に選べるとすると、いつでも近くに川や湖、海が見え、木々が点在する開けた場所を好むと言われています。街に暮らす人間はサバンナのような中間的領域をつくりだします（公園を想像してみてください）。このような生活に適した環境に隣接する森は、恐れを抱く存在であるとともに恵みをもたらしてくれる特別な存在でもあつたのです。

◎わかつてきた森の力

バイオフィリア仮説をウィルソンが発表した頃は、この仮説が正しいかどうかは証拠と事例を積み重ねるしかないと言われていました。しかし、二〇一〇年以降この証拠が積み重ねられてきています。それらの研究によると、街の緑がメンタルヘルスの改善、心血管疾患の罹患率と死亡率の低下、肥満と二型糖尿病のリスクの低下、妊娠経過の改善などの有益な効果をもたらすことが明らかにされています。

少し具体的にご紹介してみましょう。日本が先行してきた森林浴は免疫応答との関連性が実証されており、自然環境によってもたらされるリラクゼーションや緑地との接触は免疫システムを助ける可能性があります。また、緑地と身体活動の関係は多くの研究があります。身体不活動は世界の死亡率の危険因子第四位で、交通手段や公園不足などの環境要因も身体不活動をもたらす要因になっています。そうした状況のなか、歴史性や文化性、広さ、生物多様性、安定性、自然度などで評価される質の高い緑地が近隣にあると身体活動が増えることがわかっています。緑豊かな住宅地に住むと座っている時間が少なくなったり肥満リスクが下がったり、また緑豊かな環境で行う身体活動はほかの種類の運動よりも効果が上がります。

魅力的な緑の空間を提供することで人々はより多くの時間を屋外で過ごし、身体活動を促進するのです。

特定の健康状態への効果も示されています。近隣の緑の質が高いほどうつ、不安、ストレスのレベルが低下し、住宅周辺に緑を増やすことは子どもの行動発達の改善やADHDの発生率低下と関連があるとされています。近くに緑地が少ないと循環器疾患のリスクが高まり、これは緑地への距離よりも利用頻度に相关しています。緑地との近接は二型糖尿病の確率低下にも関連し、緑地とインスリン抵抗性の逆相関も示されています。近くの緑地の量は全死因の死亡率に影響を与えるという研究結果もあります。

私たちの生活に必要な様々な恩恵を与えてくれる森は、私たちの心身にも様々な恩恵を与えてくれる存在であることがわかってきているのです。

● 次の百年への森づくり

こうした存在として森を考えると、橿原神宮の森はどのように捉えればよいでしょうか。二〇二二年のCOP15で採択された昆明・モントリオール生物多様性枠組みでは、ネイチャーポジティブが二〇三〇年までに達成すべき目標として設定されました。30 by 30（サートイーバイサーティー）が国際目標として約束され、二〇三〇年までに生物多様性の損失を食い止め、回復させる（ネイチャーポジティブ）というゴールが設定されています。30 by 30は、二〇三〇年までに陸と海の三〇パーセント以上を保護地域として、健全な生態系として効果的に保全しようとするものです。

日本では現在、陸域の二〇パーセント余り、海域の一三パーセント余りが自然公園等の保護地域として保全されていますが、二〇二三年度から日本でも30 by 30達成のためのOECM（保護地域以外で生物多様性保全に資する地域）の推進として、自然共生サイトの登録が開始されました。OECMとは、生物多様性や自然保護は目的としていなくとも、日々の関係性により結果としてそれが守られているエリアをいいます。

神社の森「鎮守の森」は、私たちの生活の一部として大切に守られてきたのですが、それは同時に生物多様性にも大きな役割を担ってきたのです。神社は現在八万社以上あるといわれています。大きくても小さくても、これらの鎮守の森は私たちの生活を

つなぐ恵みと、私たちの心身のウェルビーイングと、生物多様性と、様々な価値を携えながら私たちに寄り添ってくれています。橿原神宮の森もその流れの内に、現在まで八〇年余り存在してきました。橿原神宮の広大な森は、私たちに安らぎや厳かさ、崇敬心を抱かせてくれるとともに、健康にも生物多様性にも寄与しており、厳かな森を変わず守っていくことの先にある価値を知ってもらえればと思います。まだ自然共生サイトに登録された鎮守の森はわずかです。橿原神宮の森も今後自然共生サイトとして歩むことも視野に入れながら、次の百年への森づくりを皆様とともに進めていきたいと願います。（了）

プロフィール 浦崎 真一（うらさき しんいち）

昭和五十四年、奈良県生まれ。大阪芸術大学大学院修了。博士論文では奈良県内の八十社余りの神社境内を調査し空間構成を研究。博士（芸術文化学）。大阪芸術大学助手、公益財団法人東京都公園協会、株式会社公園マネジメント研究所を経て現在、大阪芸術大学芸術学部准教授。専門は造園学、環境デザイン、近代造園史。近年は黎明期の公園が成立する過程と意義に関する研究、緑地のウェルビーイング向上価値の認知のための活動に取り組む。

